令和５年度　第２回中津川市総合計画推進委員会　主な意見

日時：令和５年１１月２０日(月)１３：３０～１６：３０
場所：中津川市ひと・まちテラス　活動室１０４

部会による事業検証の報告

・第１部会
・リニアを活かす戦略のうちのリニアの宿場を作るまちづくりについて、事業説明と現地視察により評価検証を行った。
・進捗に差はあったが、ハード事業の整備が進められていた。市の未来の為に適時適切なタイミングでの対応をお願いしたい。
・ハード整備を、第２、第３部会で所管している中心市街地のにぎわいをつくるまちづくりや、人の流れを地域に呼び込むまちづくりといったソフト施策と統合して、目指す姿を具現化していく重要な時期になる。

・第２部会
・中心市街地のにぎわいをつくるまちづくりについて、事業説明と中心市街地を歩いて町の実態を見学し、評価検証を行った。
・中心市街地には貴重な資源とその資源を活用する若い力もあるが、人口減少により、空き地や空き家、空き店舗の増加が懸念される。それらを克服するには、中心市街地の活性化に向けた意識の共有、幅広い連携、情報の発信が必要である。
・意識の共有については、策定された中心市街地まちづくりビジョンを広く市民に浸透させる取り組みと、自分ごととなってもらえるような雰囲気づくりが必要である。
　幅広い連携では、飲食の魅力も大きな要素であり、市、商工団体、金融機関などの連携が必要と考えられる。ひとまちテラスができたことにより以前より高校生の姿を町中で見るようになった。それらを活かして、さらに、地域の商工団体、学校、市内大学生と繋がっていくと良い。
　情報の発信については、町がいかに魅力的であっても、知られていなければにぎわいを創出することは不可能であるので、ＳＮＳ等を通じた情報発信は必須である。
　今後も具体的なデータを使って事業の検証をしながら、さらなる活性化につなげ、にぎわいを創出していただきたい。

・第３部会
・人の流れを地域に導くまちづくりについて検証し、リニア開業の波及効果による地域の魅力の向上について、事業説明と落合宿本陣等の視察等により評価検証を行った。
・市の各分野の部署の中では取り組みがされているが、他分野との連携が不足している。例えば文化部門では文化的な視点で文化的な価値を大事にしているのだが、それを活かした観光というところの視点は少し足りない。
　それぞれの分野だけではなく、市の全体の目標に向かって、どのように連携することができるのかということを絶えず考えることで、関係人口や地域における持続可能な観光、地域の発展に繋がっていくのではないか。

議事１　中津川市総合計画中期事業実施計画（令和元年度～令和４年度）の評価について

・事務局より
「【資料】中津川市総合計画中期事業実施計画（令和元年度～令和４年度）評価書（案)」により説明

・主な意見（リニア開業に向けた基盤整備）
・リニア開業に向けた基盤整備については、中津川市総合計画後期事業実施計画の中でも、状況に応じて、何か変更があれば随時目標値を変えていく必要がある。

・中津川市はリニアの駅が岐阜県でただ一つできる町なのだというイメージが湧いてこない。市の形がこのように変わっていくのだということを、市民一人一人が理解、実感しやすい形で示していく必要がある。
・道路の整備にしても駅周辺の整備にしても時間がかかることであり、調整が必要なことも種々あるかとは思うが、戦略的に種をまきながら将来につなげてタイミングを逃さず動いていただきたい。

・主な意見（若者の地元定着・移住促進の強化）
・市内に就職するのは地元出身者が大多数である。Ｉターンや移住に目がいきがちだが、ここで育った子どもに地元に残ってもらえるのならば、そこに力を入れるべきなのではないか。
・若い子が都会に憧れ抱くことは当然だが、都会に進学、就職した後に地元を考えた際にワーカーサポートセンター等の支援を知っているだけでも、一歩踏み出す勇気になる。それを外へ出て行く前にインプットしておくことが大事ではないか。
・一生を通じての可処分所得を比較すると、中津川市は都会に負けていない。生活環境を含めた地元の良さ、地元の企業や産業。そういったことについてデータを集めて、年収と生活のバランスを含めて小さい頃から植え付けていくと、少し時間かかるかもしれないが、いい形が見えてくるのではないか。
・従来の就職の条件は、第１に給料、その後に休みという優先順位だったが、最近は休暇が条件に出てくる人が増えている実感がある。ここ十数年で Well-Being に対する意識は上がってきており、企業も給与以外の面で環境を整えて行かなければならない。
・恵那と中津を分けていてはいけない。せめて瑞浪ぐらいまでを巻き込んで、この地域で、若者の地元定着に取り組まなければならない。
・地元に残りたいと思うのは、やはり市に魅力があればこそではないか。高校生が地元を愛して、生き生きとしてくれたら自然と地元に定着してくれるのではないか。
・若者の地元定着には地元の魅力、ふるさと教育も重要ではないか。幼い頃から育った地域への思い、親の背中や町を担っている方々がそれぞれの分野で一生懸命、地域の活動も含めて行っている。そういったことを引き継ぎながら続けていくところをいかに見ていてもらうかが重要である。

・主な意見（人々がかがやくまち）
・出生数が少ないのは危機的な状況であるが、病院事情等の環境を考えると、市内で産まなくとも、子育ての段階で、資金面を含め様々な面で大変となったときに、親元に戻る、生活しやすい地元に戻るという選択もあるのではないか。ただし、子どもが産める場所が市内に存在しないということは出生数に影響があると思われるので、市民病院でも環境を維持する必要はある。
・公立病院の経営を考えると、坂下診療所も抱えている状況ではこれから先は成り立っていかない。赤字を許容して市民病院を維持していくのか、民間の病院などと提携していくのか。市の医療体制を考えて行かなければならない時期に来ている。実家に帰って出産ができるような、そういう中津川であって欲しい、それを持続可能な状態をいかにして作るか、大きな分岐点に来ている。
・少子化の進行の原因として晩婚化が進んでいることがある。社会の維持には女性の活躍不可欠であるため、子どもの放課後のケアなどは女性の両親の助けが充実しているといいのではないか。義父母だと遠慮してしまうところがあるが、自身の親の場合は遠慮をせず助力を求められるので、いわゆるマスオさんを作る方ことが一番いいのではないか。市の消滅可能性を考えると、若い女性にいかに地元に残ってもらうかがカギとなるのでそういう発想があってもいいのではないか。マスオさん推進都市中津川市というのも面白い発想で、注目を集めるかもしれない。

・主な意見（やすらぐ自然につつまれたまち）
・市の斎場は古く、建設は急務であるが、例えば墓地を整備しても墓じまいやお寺に預ける人が多くなり、空いたままというところが多くなってきた。墓地等の時代によって市民の意識が変わっていくものについては、市民の同意、市民の意識の醸成が大事である。
・消防団員は本当大事な役割を地域で担っているが、その機能、消防団に将来にわたって何を求めていくのかについて、若者の定住などにも関わってくることもあるので検討してもいいのではないか。
　最近はあり方、意識が変わってきているということはあるようであるが、旧来の大会ありきの運営では今の若い人には到底受けいれられない。大会ありきということについては大幅に変えていかないと、団員の充足率は変わらない。むしろますます下がっていくのではないか。

・中津川市のごみの量について、令和３年度の数値で県下２１市中１９位であったが、令和４年はまたワーストに近いのではないかとのことであった。中津川市は他市に比べると分別が甘く、リサイクルに回せるごみが燃えるごみとして処理されているため、ごみの量が多いとのことである。しかし、その正確な数値、市民がどれだけごみを減量したらワーストを切り抜けられるかということについては、明確な数値を出していない。そういったところから市民に周知をしないと今のまま何も変わらない。
　年間の総ごみ排出量が市で設定した目標を達成したことで満足している場合ではなく、ワーストか、ワーストに近い家庭ごみの量をせめて県下平均に持っていくという目標があるべきではないか。

・主な意見（活気あふれるまち）
・中津川市全体が盛り上がるためには、まずは中心市街地が活性化をしないと市域全体にまで波及していかない。しかし、中心市街地に任せておけば、周辺地域は潤っていくのかというとそうではない。地域として、中山間の地域においてやれることをやっていかなければならない。
　創業支援について、以前は基幹産業、主産業に基づいた創業が多かったが、近年は全く関係がない様々な業種が、個人若しくは家族でできる範囲で行う起業が増えてきている。そういった場合は市の創業支援を資本に創業する方が出てきているので、効果はあったのではないか。
　恵北地域においては、人口減少からくる労働力不足の影響が強く、既存の事業を継続していけるか将来的に非常に不安な面がある。
・中心市街地において空き店舗が増えている実感はある。しかし一方でコロナ後ないしコロナと並行するような形で、特に若い方の様々な業態での開業が増えてきている。そこを上手にマッチングしながら、空き店舗のシャッターを一つでも開けられるような取り組みができると良い。それには空き店舗の家主等の意識が鍵になってくる。まちづくりに志のある方々がいかに家主等を納得させて、空き店舗を利活用していく仕組みと中心市街地におけるまちづくりの意識が重要である。
・農業について、集積を目指してやっているのだが条件のいいところだと自分でできるので集積が進まない。そして、集積のニーズがあるのは農業者の高齢化により、できなくなった条件の悪い土地である。農業も本当に高齢化が進んでおり、新しく移住して農業を始める人もいるが、辞めていく人の方が多い。
・様々な施策における問題と同様に、あらゆる分野で担い手の不足が顕在化している。いかにして人を確保するか、人を呼んでくるか。今までのやり方について継続するのか改めるべきなのかを評価していかなければならない。
・人を呼び込むということについて、企業等でも市でも、魅力があるとは働く人、住んでいる人が生き生きとしていることである。働いている人、住んでいる人が楽しそうにしていないと人は入ってこない。